

淀川水系流域委員会（専門家委員会）
議事概要

1. 日 時：令和3年3月23日（火） 10:00～12:15
2. 会議方法：Web＋書面開催
3. 出席者：別紙 委員名簿より

4. 議事概要

1)

委員：水循環基本法に基づく各種取組について触れられていない。水に関わる法律の上位法であると位置付けて、記載すべき。また、利水について、今は人口減少が確実にもかかわらず、河川整備計画策定当時の拡大・拡張局面の考え方が根底に残っている。節水を社会に求めるのはスローガンからおろせばよい。水の安定供給や渇水への備え、対応については重要なので肅々と進めていく、というような視点で良いのでは無いか。

事務局：検討の上、計画の案に反映したい。

委員：大戸川ダム の代替案については、H28 のダム検証時から前提条件が変わっているため、大戸川ダムの優位性が変化しているのでは無いか。例えば、利水ダムの活用案では喜撰山ダムが考慮されていない。

事務局：ダム検証において代替案を比較しているが、ダムの事前放流かダム建設かというような2者択一ではなく、ダムの事前放流とダム建設の両方を進めていく内容としている。

委員：ダム検証においては、コストで対策の優位性が評価されており、コスト以外の要素の総合的評価がどのようになされているのか不明確である。少なくとも、大戸川ダム以外の選択肢についても整理されていることが望ましい。過去の流域委員会の提言では、ダムの代替案が無い場合に限り作るとされていた。全員参加型で流域管理を進めて行くためには、歴史的経緯を踏まえるべき。

事務局：資料を作成し、説明したい。

委員：流域治水はあらゆる関係者の参加を前提としているが、現在の流域治水協議会は行政機関だけであり、河川協力団体等も協議会の構成員に加えることを計画に明記すべき。

事務局：流域治水の協力機関は拡張していく予定であり、今後も柔軟に拡張していけるように、検討の上、計画の案に反映したい。

委員：今回の計画のベースになっている「現行目標の1.1倍」について、雨量が気候変動で1.1倍になるのは分かるが、雨量と流量の関係のわかりやすい説明資料を作成頂きたい。

委員：目標流量をどのような考え方、背景で設定しているのか、文章化しておくべき。

事務局：資料を作成し、説明したい。

委員：資料3-3は非常に大事な整理。全て書くのは大変かも知れないが、経緯はまと

めておくべき。

事務局：経緯が分かるように整理する。

委員：1.1倍の設定根拠について、分かりやすく整理すべき。

事務局：資料を作成し、説明したい。

委員：上下流バランスは整備計画策定当初から当たり前のことであり、今あらためて説明している趣旨は何か。

事務局：整備計画策定時から一貫している考え方のため、再度説明した。

委員：ダム容量確保について、堆砂容量を活用することはそんなに意味があるのか。堆砂容量を浚渫等により容量を再確保したとしても、最低水位を下げないことには水が溜まってしまうと効果がないのではないか。確保した容量の管理方法が不明確である。

事務局：一般的な対策を記載しているが、堆砂については維持の側面が大きいので誤解の無いような説明をしていきたい。

委員：越水に対する堤防強化の場所は記載あるが、粘り強い堤防については場所の記載が無い。

事務局：具体的な場所が決まっていないため。調査検討により決めていきたい。

委員：流域治水は、河川管理者だけでなく幅広い関係者が集って対策を進めていく、というのが基本的な考え方。避難を考える場合に一番重要になるのは住民自身。住民自身が流域治水協議会に参画するのは難しいと思うので、地先地先で草の根でやっていくことが大事。

以上

淀川水系流域委員会【専門家委員会】委員名簿

令和3年3月3日

◎委員長 ○副委員長

氏名	分野	所属等	備考
イトウ 伊藤 禎彦 サダヒコ	利水・利用	京都大学大学院 工学研究科 教授	Web
オオクボ 大久保 規子 ノリコ	人文・経済・社会	大阪大学大学院 法学研究科 教授	Web
オオノ 大野 朋子 トモコ	環境	神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 准教授	書面
○ タケモン 竹門 康弘 ヤスヒロ	環境	京都大学 防災研究所 准教授	書面
タチカワ 立川 康人 ヤスト	治水・防災	京都大学大学院 工学研究科 教授	Web
◎ ナカガワ 中川 一 ハジメ	治水・防災	京都大学 防災研究所 教授	Web
ホリノ 堀野 治彦 ハルヒコ	利水・利用	大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授	Web
ヤモリ 矢守 克也 カツヤ	危機管理	京都大学 防災研究所 教授	Web

(敬称略・50音順)